「やまとうた」と「やまとうり」

秋永一枝

一

古今和歌集の声点注記本の中で、仮名序の冒頭「やまとうた」に声点注記のあるものは数多い。その中で、声点の注記が「やまとうた」〈平平上平平〉、「したてるひめ」〈上平平上〇〇〉、「すなほに」〈平上上〇〉と続くもの、更に巻一では「(袖)ひちて」〈平上〇〉、「(花とや)みらむ」〈〇平上〉、「おりければ」〈平上〇〇〇〉と続くものは、貞応本・嘉禄本・伊達家本(刊記なし)といった定家本系統とみてまず間違いない。それぞれの声点の異同や差声者については別に考察するが、冒頭の「やまとうた」の声点に関しては定家本系統のみならず殆どの古今集声点本が〈平平上平平〉と差声している。定家本のうち、二条家は貞応二年本を、冷泉家は嘉禄二年本を相伝し、京極家は永仁二年(一二九四)に為兼が伊達家本を所持し、冷泉為相所持の嘉禄本と校合したことが同書の奥書にある。また、田村緑氏[1]は弘安元年(一二七八)花山院師継書写の貞応本の奥書によって、「定家自筆の貞応本に本来声点がなく、為家によって付けられたという可能性を示」されたが、もしそうであったとしても、声点の注記者を差声者と移点者に分けて考えた場合どうであろうか。ある本、例えば嘉禄本に定家が声を差し、定家自筆の貞応本に為家がその声を移点したとする。その声点の原差声者は定家としてよいであろう。(定家の差声については稿を改める。)ともあれ十三世紀後半に為世・為兼・為相がそれぞれ自家の説を主張する頃、為氏の妻の兄弟である飛鳥井雅有は顕昭の声点本の多くを書写していた。その中の「顕昭古今集序注」(京都府立総合資料館蔵)の冒頭「ヤマトウタハ」にも同じ声点が注記される。その時点では二条・京極・冷泉家のみならず、六条家の顕昭の系統もすべて共通の「やまとうた」の声を相伝していたことになる。

但し、平安末期から「やまとうた」のアクセントが〈平平上平平〉で安定していたというわけではない。「類聚名義抄」では、観智院本が〈上平上上平〉を、鎮国守国神社本が〈平平平上平〉を注記するし、時代が下れば古今集の注釈書その他にも異なった

声点が記され論じられてくる。次に、それらの注釈を含めて紹介し、そのアクセントについて考えることにする。(一)で＊印を付したものは、拙稿「古今和歌集声点本の研究　資料篇」にその部分の写真があるので参考にして頂きたい。尚／以下は室町以降の伝授である。

(一)〈平平上平平〉の声点注記

＊顕昭序注（京都府立総合資料館本）・伊達家本・＊高松宮家（嘉禄二年）本・陽明文庫（同年）本・京都大学中院本（他、貞応二年七月本多数）・梅沢家本（貞応二年奥書）・広島大学本（同。夢老奥書）・寂恵本加注・昆沙門堂本註（本文）・東山御文庫本六巻抄[2]・／＊天理堯恵聞書・＊尊経閣堯恵聞書・＊古今私秘聞付声句点・＊古今私秘聞（「やまノ二字平声　と上声　うたノ二字又平声也」）

(二)二様以上のよみかたを注記するもの

(イ)昆沙門堂本註

ヤマトウタ〈平平上平平〉ハ人ノ心ヲタネトシテ……＼註曰ヤマトウタニ両家ノ読アリ　＼一条家ニハ　ヤマトウタ〈上平上上平〉トヨムナリ　＼六条家ニハ　ヤマトウタ〈平平上上平〉トヨムナリ

(ロ)京大古今伝授聞書

＼やまとうた〈平？？上平〉ハ……＼やまとうたの声を大和とウリなと云様にハよみくたすへからすといふ古へヨリノ庭訓也　如此読下ハ他流の説なり　他流とハ六条家ノ説也　当流ハ大和国と云様に読と也　やまハ平声　とハ上声　哥ハ平声　如此とをあけて哥をハ下様に読へし

(ハ)東山文庫本六巻抄[4]

やまとうた〈平平上平平〉はひとのこころをたねとして、やまとうりなどいふ様にはいはぬなりと庭訓也。

(ニ)片桐本異本六巻抄[5]

山は平声也。清音によむべき也。やまとぶりなどいふやうにはよまぬ也と庭訓也。

(ホ)一条兼良「柿本備材抄」[6]下

春日詠ニ松有ニ佳色一和歌　和字冷泉家ニハ国ヲイヘルヤウニヨム也　二条家ニハ瓜ヲイヘルヤウニヨム也　二条冷泉　是別和ノ字ノカハリ也云々

(ヘ)清原宣賢「日本書紀抄[7]」

＼ヤマト、云ニ・字声アリ・古今ノ序ニ・ヤマトウタト云ハ・此書ノ・ヤマトフミト云・字声トハ替レリ・假令・太和国・此声・ヤマトウタノ声也・大和爪・此声・ヤマトフミノ声也・ヤマト歌ト云声ハ・定家説　山跡ノ義也・ヤマトフミト云声ハ・六条家説　山戸山止ノ義也・

(ト)「正徹物語」[8]上

和哥の声の事、家隆の説とて執する方も侍る歟。我等は俊成・定家の家の説の外は、不存知也。其は定家　大和紙にあらず云々。大和紙とすみあがりたる声也。さればたゞやまとうたとさがりたる声に云ふべき也。

(チ)定家「和歌会次第[9]」

Aやまとうた〈平上上平平〉家説。

やまとうた〈平平平上平〉清輔朝臣説云々。

Dやまとうた〈声疑問〉家説、基俊説也
やまとうた〈声疑問〉清輔之説、是又互不加難所習伝也

(ﾘ)冷泉為和改編「和歌会次第」[10]
やまとうた〈平上平平〉家説、基俊説也
やまとうた〈平平?上平〉清輔説也、二条家ニ用ユ

(ヌ)冷泉為和「題会庭訓」の「講師之事」の項[11]
当家には此やまとうたを大和国をいふ様に云也、二条家にはやまと瓜といふやうによめり

(ﾙ)京大中院本「伊勢物語注」
やまとうた　＼御鈔云＼私云・定家卿筆之和歌抄物ニやまとうた〈平平上平平〉家説　やまとうた〈平平平上平〉清輔朝臣説云々
私云此朱ノ声深奥書也

二

(一)に示すように、古今序の本文における声点注記は、諸家ともに○○●○○型を注記する。これは室町以降の伝授においても、相伝の声点注記本の声点を移点するという形で行なわれた結果当然のことである。口頭で、山ノ二字ハ平声ニョム…と伝授した場合もまた同様である。そこでは、現実の変化したアクセントによって声点を差す必要はなく、理解すると否とにかかわらず、ただひたすら相伝の声点を注記すればよかったのである。

ところが、他説を退け、家説の正当性を主張し、これを伝授しようとするとなかなか難しい作業となる。まして南北朝から室町へと大きなアクセント変化の中で、語頭の低い拍の連続が消滅していく過渡期である。

(二)(イ)の「毘沙門堂本註」は、相伝系図に「如願(秀能)—行念—上観—慶盛」とある。如願は仁治二年(一二四〇)五十七才歿であるから、定家より二十二才ほど年下。上観房の名は「京大本古今秘註抄」の中に、正応四年(一二九一)に「上観在判」の、元応二年(一三一九)に上観房から某に伝授の奥書がある。生年は不明だが恐らく一二七〇年以前の出生であろうから鎌倉アクセントで生育したと思われる。次の慶盛がどの程度この注釈に筆を入れたか不明だが、彼は元徳三年(一三三一)成立の「臨永集」の作者[12]であり、更に道果の弟子の学僧であり貞治六年(一三六七)の奥書[13]があるところから、南北朝より以前に言語形成期を過ごしたであろう。

(イ)で注目すべきは、「ヤマトウタ」に三様の声点が注記されているばかりでなく、新しい変化型がみられることである。

(序中)〈平平上平平〉(i)
(註釈中)両家ノヨミアリ
二条家〈上平上上平〉(ii)′
六条家〈平平平上平〉(iii)

先に上げた「類聚名義抄」を再度上げれば、「観智院本」僧中48(25ウ)は(ii)′と同じく、「鎮国守国神社本」は(iii)の他に〈平平平平〉(iv)を注記することになる。観智院本は、建長三年(一二五一)順慶書写の写しで誤写も少なくない。恐らく、仁治二年(一二四一)に慈念が書写した時点では〈平平上上平〉ではなか

ったか。それが再々の書写の末、当時のアクセントから〈上平上平〉を記してしまったものと思われる。建長三年から、あまり遠くない時期の書写とされているが、「ヤマトウタ」に(イ)の(ii)′と同一の変化型●○●●○を注記することは、○○●●○の不安定型がもはや保たれなかったことを示している。顕昭注袖中抄の高松宮本巻十二（鎌倉写）の「倭姫（命）」の振仮名の声点に、二か所〈上平軽上平〉が差されており（「ト」の〈平声軽〉の位置は〈上〉のずれか？）、いずれも、「やまと」の○○●型が●○●型に移ったことを示唆している。

大野晋氏[14]によれば、行阿（一二九四年頃出生、一三六四年に七十才以上）の時代に於ては、〈平平〉から〈上平〉、〈平平平〉から〈上上平〉といった低平調からの変化は起ったが、〈平平上〉から〈上平平〉の変化は起っていなかったとされ、「この変化は、先の諸変化より後れて南北朝以後に始り、江戸時代初期には完了してゐた……」と書かれた。然し、氏の掲げられた例を見ると、殆どが動詞と形容詞の例である。これは当然のことで〈平平上〉で「お・を」が語頭の名詞は殆どない。定家が「お」を用いた「御前」は天理本古今集顕昭注で〈平平上〉（意義はずれるが）、「同じ」は名義抄・四座講式など〈平平上〉であるのに同顕昭注は〈上平濁平〉を注記する。この書は飛鳥井雅有書写の写しだが、雅有は一三〇一年に六十一才で歿とあるから行阿より五十才以上の年長であり、恐らくは書写の人が自分の変化型を移点したものと思う。

然し、動詞や形容詞はグループでまとまり、或いは影響されまた或いは牽制されるから、アクセント変化が一斉に起りやすい。名詞の場合は○○●型・○○●型ともに個別的な変化が起りやすく、個人差も多いと思われる。特に「やまと」の場合、「山跡・山戸・山止」の語源説があり、「山」が○○型から●○型に変化した場合、○○●型から●○●型への過渡的な変化は起りやすかったと思う。

金田一春彦氏[15]によれば、文永年間（一二六四年～一二七五年）の「仏遺教経」の譜本には、「名義抄」で○○●型の語に多く●○●型を思わせる曲調がついているという。そこまで溯れなくとも、古今集諸本に時に現われる変化型から考えると、南北朝以後というよりもう少し早い時期に、〈平平上〉から〈上平上〉の個別的な変化が始まっていたとしたほうがよさそうである。

三

さて、南北朝から室町へとアクセント変化が進んでくると、「やまとうた」のアクセントを声点注記で比較するのは難しくなり、同じアクセントをもつ日常語を援用して説明しようとする。そこで、「大和瓜・大和の国・大和書・大和紙」などの語が伝授に際して登場する。

古今集の発音について講義する際、アクセントが安定している語をもって説明すれば、伝受者も理解し易いに違いない。然しそれも、六巻抄における行乗（一三一四年に定為の、一三二七年にその兄為世の講義をうけ翌年奥書を受けた。）あたりであれば、「やまとうた」は○○●○○型で「やまとうり」のアクセントのように発音してはいけないという庭訓（六）が理解できたであろ

う。(二)の片桐本で「やまとぶり」と濁点を付して翻字してあるのは、恐らく「山」が「清音によむべき也。」とあるのに続くからであろう。これは(八)の「やまとうり」がもとの形で、「瓜」をフリとも言うことから「やまとふり」と記したことが後世理解できず「大和振?」ととったために、「清音によむべき也」などの注を挿入したのではなかろうか。

では、「やまと歌」及び、これと比較される「やまと瓜・やまと書・やまとの国」における鎌倉期のアクセントはどのようなものだったか。まず初めに、注記例のあるものから考えたい。

「やまと」は五類で〈平平上〉○○●型、「歌・書」は二類で〈上平〉●○型、「瓜」は四類で〈平上〉○●型、「国」は一類で〈上上〉●●型である。同じ声点注記（類別不明のものを含む）で、類似の複合のみられる前後部成素を次に記す。（以下、《　》内の注記は単点・双点の区別をしない。×印は他の型もあると思われるもの。）

前部成素

《平平上》○○●型　×飛鳥・×荒磯・油・涙・吉野・（大和）

○○◐型　単衣

後部成素

〈上平〉●○型　川・坏・姫・（歌・紙・書）

〈平上〉○●型　海・衣・（瓜）

○◐型　琴

〈上上〉●●型　舞・（国）

〈平平〉○○型　角・綿

（なお、「百済・新羅」は、《平平上》か《平平平》かと思うが不明。「百済」のみ《平平上》かと考えて扱うことにする。）

右の前部成素＋後部成素では次のような型がみられる。（以下、引用は適宜略称を用いる。）

①《平平上》＋〈上平〉

(i)《平平上平平》

「やまと歌」　古今序本文中。（前出。）

(ii)《平平上上平》

「あすか川」　高貞933・寂64 341

「なみだ川」　顕天平（墨圏点）598・昆527

†「くだら記」　前田本書紀巻十四（「ラ」の声は〈平〉）

（軽〉の位置）

(ii)′《上平上上平》

「やまと歌」　昆（二条家）：観本名義

「やまと姫」　†高松宮本袖中十二（「ト」は〈上〉か）

(iii)《平平上上平》

「やまと歌」　昆（六条家）・和歌会次第（清輔朝臣説）・

†為和改編和歌会次第（清輔説也　二条家ニ

用ユ。「ま」の声翻刻不明）：鎮本名義

「あすか川」　訓284

「なみだ川」　昆466・511

(iv)《平平平平》

「やまと歌」　鎮本名義

(v)《平平上上上》

「よしの川」　毘124 124° 471・高貞471（尚、寂124°は〈○○○上上〉）

「あすか川」　毘64（尚、伏片64・毘341 687は〈平上上上上〉で、「あすか」に○●●もあったろう。）

(vi)〈平平平平上〉

「あぶら坏」　伊廿本和名・観†本名義（「フ」の双点は〈平〉ならん。仏下末52（27ウ））

②〈平平上〉+〈平上〉

(i)〈平平上平平〉

「ありそ海」　寂818（毘〈平平上○○〉818も同じか）

「やまと琴」　高†松本袖中巻廿（「ト」は〈上〉か）

(i)′〈平平上平上〉（古今では、(i)に変るか）

「ありそ海」　顕府(20)（尚、訓(20)は〈平上上平上〉で、「ありそ」に○●●もあったろう。）

(vi)〈平平平平上〉

「ひとへ衣」　図本名義・京本和名

（「くたら琴」　図本名義。尚「しらぎ琴」の伊十本・京本和名、図本名義もこの型。）

(vi)′〈平平上平上〉（和名・名義では(vii)に変るか）

「やまと琴」　京本・伊十本和名、図本名義。観本名義は〈平平○平上〉

③〈平平上〉+〈上上〉

(vii)〈平平平上上〉

「やまと舞」　顕天片1070°・顕大1070°

(ii)〈平平上上平〉か、(iii)〈平平平上平〉か

「やまと舞」　永（○○○上平。墨点）1070°（尚、毘の〈上上○上平〉1070°は、変化型ならん。）

④〈平平上〉+〈平平〉

(iii)〈平平平上平〉

「あぶら綿」　図本名義、京本・伊十本・伊廿本和名

(iv)〈平平平平平〉

「あぶら角」　観本名義・伊廿本和名

④は直接関係がないようだが、それでも古く安定型が現れる。以上には「やまと瓜」も「やまと書・やまと紙」もない。然し「やまとの国」は、「やまとの守」780°が「毘・高貞」で〈平平上平○○〉であり、「の」は当時〈平平上〉には低く接続するから、〈平平上平・上上〉だったと推定できる。次に、流派との関わりや、アクセント変化後の型も考慮しながら考えたい。

四

「やまと瓜」の記述は「六巻抄」が早く、「瓜」は○●型であるから②の複合となる。その例から見ると、後部成素の型が生きる(vi)の〈平平平平上〉か、複合が強くて前部成素の型が生きる(i)の〈平平上平平〉になりそうである。然し、(ハ)の「六巻抄」で、「やまとうた」〈平平上平平〉は「やまと瓜」のようには言わぬのだ、とあるから、(i)は除外される。

ところが、「和名抄・名義抄」で「瓜」の下接する語を調べると次のようである。

〈平平上〉　胡瓜（京本・前本・伊廿本和名、観本名義、前本色葉）

〈上上平〉　黄瓜（伊廿本和名）

《平平平上》青瓜（観本名義。伊廿本和名は〈○○平上〉）・冬瓜（京本・前本・伊廿本和名、観本・鎮本名義）・寒瓜（鎮本名義）・白瓜（京本・前本・伊廿本和名、観本・鎮本名義）・そば瓜（京本・前本和名。伊廿本和名は〈上平上平〉。観本・鎮本名義）

〈上上上平〉青瓜（京本・前本和名。伊廿本和名は〈○○平上〉）・寒瓜（京本・前本・伊廿本和名）

《平上上上平》烏瓜（京本・前本和名、観本・鎮本名義）・たちぶ瓜（伊廿本和名。京本・前本和名は〈○上上上平〉。観本名義）

《上上上上平》斑瓜（京本・前本・伊廿本和名、観本名義。鎮本名義は〈上上上上○〉）

高起式はすべて●…●○型で「ウ」まで高い安定型である。低起式の三・四拍語は「瓜」のアクセントを生かして末拍のみ高い○…○●型であるが、五拍語は二例ともに○●●●○型である。「たちぶ」のアクセントは不明だが、「烏」は○●●型であるから、前部成素のアクセントを生かした安定型である。

かつて述べたことがあるが[16]、このような複合名詞の場合、新しい複合形が現われても後部成素の同じ語の多数形アクセントを類推して同じアクセントの型をとろうとする。（たとえば「……川」は、(iii)の安定型もあるが(v)の……●●型もみられるように。）「やまと瓜」は恐らく〈平平上上平〉に一まずなったであろう。一まずというのは、このアクセント型は少数型[17]で安定型ではない。そこで〈平平平上平〉の多数型に変化することがある。また、時代が下がって●○●●○型を経て●●●●○型に変化することも起きてくる。

「やまと歌」は「毘」の序本文では〈平平上平平〉だが、二条家では〈上平上上平〉だとするのも、六巻抄の記述に符合する。

兼良が(ホ)で「二条家ニハ瓜ヲイヘルヤウニヨム也」というのは、この○○●●○型、もしくはその変化型○○○●○型で「やまと歌」を発音しているという口伝があった為と思われる。兼良は応永九年（一四〇二）の生れ、すでに「やまと」のアクセントは変化していたろうが、「やまとうた」の「と」まで高い型と「う」まで高い型とは区別できた筈である。

「六巻抄」では「やまと瓜」が比べられたが、兼良にいたっては「和」の字のアクセントは冷泉家では国の名を発音するように言うのだ、即ち、ヤマト|・ヤ|マト|、いずれとも記してはいないが、国の名と同様にトを高く発音してウを高く発音しないのだという点に異なりを認めたのだと考える。

兼良は声点注記の豊富な「岩崎本日本書紀」に訓点をさすほどの学者である。そこに注記された声点が兼良の頃のアクセントと異なるものが多かったために声点を差す作業に消極的だったのかもしれない。そこで、(ロ)と同じく「やまと瓜」と「やまとの国」

を援用して説明しようとしたものだろう。つまり、ここで「国」という引用は、③のように「やまとくに」の(vii)〈平平平上上〉を示すのでなく、「やまと」そのもののアクセントを示しているのだととりたい。③に於ても、(ii)の〈平平上上平〉をとることはあり得るが、それは使いなれた上での事である。一般には、助詞「の」を入れて「やまとの国」と発音するのが日常であろうから、「やまとくに」の語が言い馴れる筈もない。兼良は下冷泉の持為（持和）と親交があり、更に兼良の子教房は上冷泉の為之の子を妻としている。(リ)の為和改編「和歌会次第」でも「家説」として〈平平上平平〉を掲げているのであるから、兼良が冷泉家の説として声を示すのには、これ以外には考えられないではなかろうか。

(ヘ)の作者、清原宣賢は文明七年（一四七五）生れで彼の実父は吉田兼倶。宣賢は兼良の「日本書紀纂疏」を書写する。(ヘ)には、「同文字読清濁以朱指声訖……」の奥書もあり、宣賢もまた、「声」の意味するところは知っていたであろうが、兼良の時代より更に変化が進んでいたから、自ら声を差すことはできなかったと思う。そこで彼は、「ヤマトウタ」の声は「ヤマトフミ」というアクセントとは違い、「ヤマトノクニ」という時のアクセントと同じだと考えた。そして「ヤマト書」のアクセントは「ヤマト瓜」と同じだとした。

書紀その他に「大和書」は見出せないが、書紀の「百済書」から類推すると、〈平平上上平〉か〈平平平上平〉か、その変化型であろうか。それなら、先に認定した「やまと瓜」のアクセントに合致する。「山跡」は頭府の「ヤマトウタ」の注にすでにあり、「耶摩止」と同じく〈平平上〉が記されている。これが定家卿の説だとすることは首肯できるにしても、「山戸・山止」を六条家の説とする義は無理があろう。

(ト)の正徹は永徳元年（一三八一）生れで兼良より凡そ二十才の年長だが備中育ちの可能性もあり、京都アクセントを習得していたかどうか疑わしい。「家隆の家の説」のアクセントは不明だが、「俊成・定家の家の説」というのは〈平平上平平〉のように早く下降するアクセントをいうのであろう。定家の「大和紙にあらず」という伝授は知らぬが、「紙」は●○型であるから、「カ」までは高く保ったことをいうのだろうか。「たゞやまとうたとさがりたる声に云ふべき也」とあるのは、(ロ)の「哥をハ下様に読へし」と同様の伝授によるものと思われる。

(チ)の定家「和歌会次第」のA「家説」の声は、(リ)の為和改編本や(ル)から考えて〈平平上平平〉の誤写であろう。(チ)(ル)の「清輔朝臣説」の〈平平平上平〉は、毘の六条家の説と合致するが、為和がそれを「二条家ニ用ユ」とするのは対抗意識の極まりであろう。(ヌ)の「題会庭訓」の方では(ホ)の兼良説と同様の伝授を記している。

為和は文明十八年（一四八六）の生れで、室町も後期に生育した。川平ひとし氏[18]によれば、改編本の伝本は凡て近世の書写である。だが、自筆本があったとしても、代々相伝の声点注記以外の語に声点をつけることはかなわぬことであったろう。為和の時代にあっては、「やまと瓜」も「やまとの国」も、重要な相伝の一

つだったのである。

○

「やまとうた」と「やまとうり」は、末尾の拍のみ相違し、しかもアクセントが対照できる恰好のことばであった。恐らく鎌倉末頃から、「と」を上げて「うた」を下げてよめ！とか、「う」を上げて「た」を下げてよめ！とかいう口伝が脈々と生き続けたものと思う。

古今集の冒頭で、「やまと歌」のアクセントが安定型の○○○●○型より少数型の○○●○○型が多用されたのは、「大和」〈○○●〉という国の名のアクセントを残すことが重んじられたからであろう。

現代の文学的感覚からいえば、「大和瓜」は「卑近なものの名」であるかもしれない。然し、その名を借りることによって、「大和歌」の相伝の声点伝授が可能だったのだ。

流派の葛藤の中で、理解しにくい声点注記語集の相伝を守ろうと躍起になっている、堂上歌人たちの姿が目に浮ぶようである。

（本稿のキーワードを次に記す。**アクセント・声点・古今集・伝授・定家かなづかい・やまとうた**）

注(1) 田村緑「古今和歌集貞応本の性格―差声のある句を中心に―」（「国語国文」53・12。S59）

(2) 片桐洋一「中世古今集注釈書解題 三」345ページによる。

(3) 「古今和歌集声点本の研究 資料篇」の2ページ・「索引篇」の393ページ上段「ママ（タの誤写か）」を削除する。

(4) 注（2）の翻刻による。但し声点は〈平〉〈上〉に改めた。

(5) 片桐洋一「中世古今集注釈書解題 三」30ページによる。

(6) 武井和人「『柿本傭材抄』の成立」補遺―附翻刻・校異―」（埼玉大学紀要「人文科学篇」32、S58・11）33ページによる。

(7) 天理図書館善本叢書「日本書紀抄」169ページ。

(8) 日本古典文学大系「歌論集・能楽論集」193ページ。

(9) 川平ひとし「冷泉為和改編本『和歌会次第』について―〈家説〉のゆくえ―」（跡見学園女子大学国文学科報十二、S59・3）による。なお注（8）の引用も同書にみられる。声点は〈平〉〈上〉に改めた。また声点の位置の不分明なものは「疑問」とした。

(10) 注（9）による。

(11) 注（9）による。

(12) 井上宗雄「中世歌壇史の研究 南北朝期」356ページ。

(13) 宮地直一「道果本古事記解説」（貴重図書複製会）

(14) 「仮名遣の起原について」（「国語と国文学」27の12）他。

(15) 「四座講式の研究」340ページの注4。

(16) 拙稿「研究篇 上」220ページ～。

(17) 注（16）の226ページあたり。

(18) 注（9）による。